

P9 東北地方南部のツボスミレ（スミレ科）に見られる形態変異

吉田政敬*・横山 潤（山形大・理・生物）

スミレ属 *Viola* はスミレ科最大の属で、北半球を中心に 400 種以上が知られている。日本は約 60 種のスミレを擁する種数の豊富な地域の 1 つで、全土に多様なスミレを見ることができる。ツボスミレ（ニョイスミレ, *Viola vercunda*) は極東ロシアおよび東アジアに広く分布する多年草で、国内では北海道から屋久島まで広域にわたって分布する。生育環境も低地から亜高山帯まで広く、湿り気のある場所を好んで生育する。生育環境が広域で多岐にわたるため、形態変異が大きく、名前のつけられているものも 4 変種知られている。このうちアギスミレ (*Viola vercunda* var. *semilunaris*) は、基準変種の次に広域に分布する変種で、湿原や山地林内などに生育する。花後に出る茎葉の基部が深く湾入して、葉身が三日月状になることが特徴とされるが、中間的な形質を示す個体も多く、区別が難しいとされている。広域に分布し生育環境によって形態変異を遂げているツボスミレは、植物の生態的な分化を考える上で好適な材料である。そこで本研究では、ツボスミレを対象とした生態的分化の研究の端緒として、東北地方南部に分布するツボスミレの各集団の花および葉の量的形質を比較して、その変異の状況を明らかにすることを目的とした。

山形県、宮城県、福島県に生育するツボスミレ集団を中心に、各集団から開放花 (9 集団) および花後の根出葉と茎葉 (13 集団) を採集して、開放花からは花弁および萼の形態に関する量的形質、根出葉と茎葉からは葉の大きさに関する量的形質および先端と基部の角度の測定を行なって比較した。その結果、開放花の形質に関しては集団間で個となる傾向にあることが示され、特にアギスミレと同定される集団では開放花が小さい傾向にある集団も認められた。それに対して、これまで変種の識別形質として用いられてきた葉の量的形質に関しては、集団内で変異の幅が大きく、各集団間で範囲が大きく重なり、集団での形態的な傾向ははっきりしなかった。葉の形質の有効性については、さらに解析集団を増やして再検討する必要がある。